

# 見えざる限界

——正常性・境界性・異常性の現象学について——

ティーモ・ブライヤー

中村拓也 訳

## 一・序 論

近代精神史において真つ向から対立する正常性概念の二つの根本形式、すなわち、「事象の本性」に対応することが正常である記述的解釈と、「人間の理性の理論的規範性あるいは実践的規範性から発出すること」が正常である構築主義的解釈とを区別することができる<sup>(1)</sup>。正常性の現象学的主題化は、概念のもつ記述的次元と規範的次元の間の相反を掻い潜る。感性と人倫性ないしは経験的正常性と道徳的規範性というカント的対立は、ここでは、どのようにして両局面の根底にある潜在力あるいは正常性の核があらゆる経験の際に妥当するものとなるのか——感性的直観であれ、道徳的感情であれ、論理的——範疇的に働く認識であれ——という問いのために弱められる。その際、現象学にとって正常性と主観性の直接的結合が判明する。しかも、意識そのものがすでに、「記述的正常性と規範的正常性と

「極の間に住まっている」<sup>②</sup>何かであるがゆえに、判明するのである。フェルディナンド・フェルマンは次のように表現している。「意識の正常性は当為という意味での規範性と同時に個別事例を超えて行く類型群という意味での合法性とを意味する」<sup>③</sup>。それゆえ、現象への現象学的従事にとつて、どのようにして正常性が意識対象性の経験と構成の異なる諸層のなかで形成され安定化するのかを調べ出すことに中心的な意味がある。

以下では、まず正常性とそれと相關的に異常性というフッサールの概念が素述される。フッサールの正常性概念が際立たせるのは、感性的水準と範疇的水準の結合である。受容的知覚の正常性は、述定的判断とあらゆる高次段階の悟性活動との規範性を基づける。正常な経験の主要基準はフッサールにとつて一律調和性と最善性である。さらに、経験の地平性を手掛かりに、簡明的確な意味での異常なものは、垂直的に意識の規範性に降り掛かるものとして理解できることが示される。しかし、どのようにしてそうした断絶をいつそう厳密に記述することができるのか。それはただ「地平的・垂直的」ないし「正常異常」という概念的対立のなかでのみ解消できたり、それを手掛かりに正常性の異常性への移行、場合によっては再び他の方向への移行を例示できる意識流のなかの過程が存在したりするのか。境界性という概念は、この意味でそうした移行現象の規定として提案され、入眠、死、とりわけ正気でなくなることはないしは正気ではないことという現象に即して解説される。この場合、精神病理学へのまなざしは、現象学的考察にとつて創造的刺激を与えるものとして証示されるが、やはり精神病理学によつて境界的意識や異常な意識と、現象学内部的に——いわば「正常な」意識のパススペクティヴから——無媒介的に表象可能ではないだろう意識の諸現出との可変性への洞察が留意される。他方で、現象学は、どのような異常性徴表を発生的にどのような正常性の構成的契機に帰することができるのかを指摘することによつて、精神病理学的・経験的研究を豊かにできる。こうした連れ戻し

は、境界性が正常性と異常性の間の中間現象としてその位相的構造と経験の過程性とを顧慮して暴き出される場合に、うまくいくのである。

## 二. フツサールの現象学における正常性概念

フツサールは「正常な経験」を「正当な経験、一律調和的に連関へと適合する経験、経験される事物性の同一性を貫き通す経験」として規定する<sup>(4)</sup>。この経験は、その感覚経過が統一的に統制されている「正統感性的」<sup>(5)</sup>身体がそれに必然的に属しているがゆえに、感性的正常性として規定することができる。こうした正常性からの逸脱は、感覚器官が損なわれている場合に、立ち現れることがある。フツサールはそれを温かさの感覚に即して例示している。同じ水は、火傷を負った手によって熱いと感覚されることがあるが、それに対して、健康な手によっては生暖かいと感覚されることがある<sup>(6)</sup>。両感覚の間で生起している矛盾がはじめて、諸々の周囲状況の下で、対応する感覚野の正常性として前提されていたものを発見させる。両方の状態を比較するならば、同様にこう想定できるだろう。二つの種類の同じ経験があり、それらの間では漸進的区別が感覺性質を支配している、と。「純粹に記述的に考察すれば、その例では、なぜ正常性の資格化のために健康に優位が与えられ、病気に優位が与えられないのかを説明できない」<sup>(7)</sup>。これは「正常な経験が、対象を一律調和的な仕方だけでなく、最善可能なあるいは『最善の』仕方で構成するような経験である」<sup>(8)</sup>というフツサールがさらに進める論証によってのみ後づけ可能になる。その場合、最善性はフツサールにとって知覚がその対象に即して発見する諸々の差異の最大限可能な豊かさを意味する。それゆえ、火傷して

いる手は、例では、水や任意の対象についての差異化された知覚を可能にする状況にはないだろう。なぜなら、主観的に感覚される痛みが、対象の客観的に手で触れて確認される詳細よりも顕著であるというように神経過敏であるからである。ところが、病気や他の異常な状態が手を、驚くべき仕方でも以上に対象の徴表を手で触れながら差異化できる状況にあったならば、この高められた触覚能力は過正常性と呼ぶことができるだろう。フッサールにとって（人工的なないしは異常な）正常性の増進はそれ自体再び異常性を意味せず、超正常性を意味する。そうした能力を所持する者は、正常な感覚の共同体の「平均」を超えている<sup>(9)</sup>。さらに、この超正常性がそれはそれで差異性基準に従って新しい正常性の尺度となることがある。したがって、正常性はたえず記述的な豊かさを保証し、それゆえ、同様に詳細化された現象学的意識分析にとつての出發の基礎を呈示する。現象学の内容的・方法的方向づけがこの場合貫徹される。正常性のさらなる根本徴表は相互主観的統制化と安定化並びにその日常的信頼性という点で生世界に属している「ある一定の類型的恒常性」<sup>(10)</sup>である。ここで類型性という意味での正常性が、習慣化の過程のなかで、同じ種類の対象性と共に反復され、反復可能な経験を通して経験類型が形成されることによつて、現れるのである。

## 二・一 受容的経験における正常性と述定的経験における規範性

これに関して、フッサールにとつて正常性はまず意識の論理的範疇的能作によつて成立するのではないことが示される。すなわち、正常性をめぐる概念的対質はすでに、受容的な、したがって、先述定的な経験の「正常な」構造を参照指示しているのがわかる。こうした受容的経験は發生的現象学において立ち入つて受動性という表題の下で分析される。

初期著作やまたなお自我と経験の自我光線の現勢性を際立たせる『イデーニー』の広範囲にエゴ論的に方向づけられた分析とは別様に、フッサールは『受動的総合の分析』で感官感覚の触発的力とその「自我極への力光線」<sup>(11)</sup>とに配意している。こうした光線は直接的に感覺質料から出発し、およそそのような触発的の光線に対する自我的「反応」が立ち現れる以前に、自我極の方向に流れる。というのは、触発的の力光線があまりに弱すぎるがゆえに自我極に達しなかつたならば、したがって、触発的の刺激が注意の閾を超えて行くような仕方では背景から際立たされなければ、この力光線は自我極にとつて「覚起する刺激」<sup>(12)</sup>にならないからである。したがって、自我の触発的覚起は、自我そのものの素質の許で始まる。およそ触発的、誘引的力を及ぼすことができるために、刺激は、およそ光の測定可能な量のように、外から確定可能な仕方では与えられていることでは十分ではなく、自我が刺激に気づくことができる仕方では与えられていなければならず、これは決定的に自我の素質に依存している。フッサールは一般に触発を、意識対象が自我に対して及ぼし、「自我が配意する際に弛緩し、そこから、自己能与的な、対象的自己をますますいっそう露呈する直観へと努力する際に継続する」<sup>(13)</sup>刺激あるいは動向と理解している。そうした動向を自我に対して及ぼすあらゆる触発は、この瞬間にすでに「触発的浮彫」<sup>(14)</sup>から際立っており、その際、この浮彫の構造は主観の以前の経験並びに習慣性と感覺上の訓練とに依存している。浮彫は、ある特定の刺激（例えば、道路工事のハンマーをたたく音）を顧慮して立ち現れることの頻繁さと持続性によって「正常化」されることがあり、したがって、根源的に顕著な感覺印象は触発的力を喪失し、もはやそれほど強く耳目を引かない——刺激に慣れてしまひもはや取り立てて注意は払われない。

フッサールがここで簡明的確な仕方では呈示していることは、「与えられるものの特殊性」と与えられるものが刺激

することと「に注意が依存すること」へのすでに初期著述で獲得した洞察である<sup>15)</sup>。知覚領野の諸要素を随意的に「目指すこと」と「度外視すること」は、それらそのものがすでにある程度正常化された形式で与えられていることを前提している。正常化はここで、諸々の要素のどれも特別な配意、例えば、特別な注目（感覚される感覚性質の対照や強烈さ）による配意を要求しないことを意味するはずである。能動的に思念することは、事物の上を自由に漂うのではなく、本質的に事物に結び付けられている、すなわち、魅惑項（注目される性格特性に基づいて特別な注意を要求する「感性的に際立たされていること」）によって受動的に誘引されることの不随意性は思念する介入の随意性にたえず先行する。対象から出発する触発が大きいので、注意が媒介されずにこの刺激源泉に引き寄せられる状態では、正常性は、フッサールの差異性基準によって規定されているように、もはや維持することができない。意識領野のそうした不随意的ずれによって阻止されるのは、差異化された、増大する明晰さへと動機づけられた知覚である。対象の内部地平に没頭することは、その際ますます対象の個別性が可視的になりはするが、外部地平のなかの何もあまりに強く際立たされせず、それはそれで焦点注意を要求しないことを前提している。したがって、知覚の水準では、正常性には、「異他的」刺激によって「妨げられずに」現出するものに専念し、知覚の際にこうした仕方でも可能なかぎり高次に被差異性に至る注意する主観の可能性が属している。

さて、フッサールの場合に知覚する意識のこうした基づける正常性と高次段階の範疇的能作の基づけられる規範性とはどのようにに関連しているのか。マーレン・ヴェーレが示すように、フッサールの場合こうした問いの際に

隠された規範性が語られている。なぜなら、意識と経験の彼の記述は、精神的に理性という尺度に定位してい

るからである。理性は、フッサールの場合理性の命令という意味では経験から独立して機能しておらず、経験そのものの本質を規定する<sup>16)</sup>。

なぜなら、フッサールによれば、普遍的意識努力、したがっていわば目的論的理性法則も経験そのものにおいてすでに対象を正しく認識することへと仕向けられているからである。これはすでに「明晰性への内属的衝迫と、フッサールが方法的に、対象そのものに至るといふ現象学的探求のなかで継承している十全化ないしは最善の所与性という理想への努力というフッサールの想定」<sup>17)</sup>に示されている。仮にこの根本想定を「規範的予断」<sup>18)</sup>として解釈できるとしても、それにもかかわらず、フッサールに一貫した規範主義を擦り付けることはできず、彼はやはり正常性の脆弱性と少なくともその局所的な崩落の可能性とを承認している。フッサールの正常主義はなるほど一面では、異常者は原理上、正常者の世界がよりよい世界であることを洞察・承認することを仮定している。

子どもたちが「色盲的に」見ている世界を正常な世界として構成する色盲者の民族は思考可能である。われわれとわれわれの正常性に関係するならば、この民族は、生まれながらに色盲である場合に、やはりわれわれの直観そのものを獲得することができるとなしに、やはり必然的に自分の世界のその独我論的構成の際にわれわれに同調するわれわれのなかの個別の色盲者がするように、われわれの正常性を容認することになる。その民族は間接的に、その民族の世界が最善の世界ではないこと、われわれの世界がいわば「いっそう真の」世界であることを認識している<sup>19)</sup>。

しかし、他方で、彼はまた、彼の正常性概念にとって大きな重要性がある完全な脱正常化の危険をはらんだ可能性を見ている<sup>20</sup>。運命論的に陰鬱な調子でフッサールはこう問うている。

さて、しかし、こうした正常性を全体的に打ち破り、私を次の状況へともたらず運命の進行の仕方もまた可能である。「私はもはや何をすべきかわからないし、どのようにして生がさらになお進んでいくべきなのか、どのようにして生が再びまた、実りをもたらさず、安定した現存在の、正常な人間的現存在の形式を想定するのかを見通すことができない」。……世界が全ての異常者を貫いてそれ自身実践的人間的世界の崩壊を貫いて、それはそれで、自然法則が受動的に満たされる等々の様式形式に依拠する同一性を維持するならば、それは何の役に立つのか<sup>20</sup>。

正常性は具体的経験の際にけっしてすっきり障害から守られていることはなく、他方で——フッサールの思考実験の際に指名されるように——そこから正常なものが正常なものとして特に判明に現れるまさに異常なものがある。正常性と異常性は、フッサールにとって、すでに解説したように、相互に、概念的な対立、いわば構造主義的状態で構築される対立のなかで対極的反対像として定義されるだけではなく、先述定的経験の水準でも対照的構成関係を形成している。経験の過程性から考えれば、正常なもの優位性はいくやく後から異常なものへの侵入を手掛かりに確立することができる。というのは、正常性・異常性複合体は、自発的な、能動的・自我的態度取得の成果ではなく、受動的に経験される異常なものへの侵入よりも前に、機能する正常性として背後を問われることなく非主題的に働いていたも



のへの洞察であるからである<sup>23)</sup>。

## 二・二・経験の正常性と地平性

先行的正常性のもつこうした水準の非主題性、その自然的自明性は、意識の地平具有性に根拠づけられている<sup>23)</sup>。意識はノエマ的にもノエシス的にも地平的に構造化されている。ノエマ的に見れば、対象的に現出するあらゆるものは、意識の主題として孤立してそれ自体で現出せず、たえず主題的に対象と結びつけられている、ないしは対象との多様な脈絡的関連を指し示している共に与えられるものの有意味的領野に埋め込まれたものとして現出する。こうした指示連関をフッサールは周知のように対象の外部地平と呼ぶ。それに対して、内部地平は内側へ向けての、すなわち、その固有の特性と内的差異を顧慮した対象の非完結性を表す。見てきたように、対象の知覚の最大可能な明晰性を手に入れるために、まさにこの内部地平のなかに知覚しながら赴く可能性が、フッサールにとって、正常性にとつての重要な基準なのである。ノエシス的に考察すれば、意識の地平性は、志向的作用がそれ自体ひとりで他の作用と結びつけられずに現存することができないことに存する。あらゆる作用は、いつそ後の（なお遂行することができ）作用のように同じ種類と他の種類の以前の（すでに遂行された）作用とを参照指示する<sup>24)</sup>。

意識の地平性は、何かがノエマ的に没地平的に現出し、共に現出するものの有意味な全連関へと統合できないかぎり、あるいは、ノエシス的に没地平的に現出し、その際先行する作用の不可能な充実（けっして失望とは同じものではない）として、ないしは以前に成立している作用の完全に空虚な予描として証示されるかぎり、断絶の垂直性<sup>25)</sup>によって妨害されることがある。その種の経験の裁量不可能性、志向的意識の措定を逃れる正常性限界の超出と下降

に対して開かれている現象学は、経験の際の一律調和性の断絶によって生じる境界性を研究するのによく役立つのである。

### 三、フッサールにおける境界性？

境界性は、抽象概念としてフッサールの場合それほど出来しない概念である。なるほどすでに現象学的知覚分析の水準で大きな役割を演じているのは、いわゆる諸々の極限形態である。外的知覚のあらゆる対象は、例えば、パースペクティヴないしは射映の無限の開放性として構成される。その際、対象はけっして全面的に現前的ではなく、表意と直観という目的論的過程のなかで近づくことができる直観の極限を呈示する——それは充実の増大の理想として統制的性格をもつ<sup>26)</sup>。したがって、対象は、考察という自我能動性によってはけっして達成されることがない限界を形成する。より以上に移行と闘具有性の諸局面とかわる境界性の別の形式をフッサールは、目覚めることと入眠することのような現象に即して——そして誕生と死に即していつそう詳細に規定されるべき類比によって——記述している。

入眠することは「生の意志のもつ積極性を沈ませることと手放すこと」であり、その際、覚醒状態という日常的活動の弛緩と離反への「意志能動性のこうした転換」、したがって、こうした否定性は「諸々の触発にもかかわる。その誘引力が共に沈降する。手放す際に私は触発するものもまた手放す。私が弛緩するならば、全体的に弛緩した関心という様態にあるならば、触発もまた訴えというその相関的緊張を喪失する<sup>27)</sup>」。入眠することは、多かれ少なかれ

入眠することへの関心を随伴していることがあり、多かれ少なかれ物体と精神の弛緩のために切望されることがあり、職業的関心であれ、情動的面倒であれ、過去の再現前化であれ、未来の予料であれ、どのように活発に覚醒状態の主題になお従事しているか次第で、遅かれ早かれ始まることがある。いずれにせよすべてこうした覚醒意識から睡眠状態へと誘導する現象は「睡眠への移行現象」である。「睡眠そのものはこの状態の極限、全面的触発の弛緩と没能動性、没意志性、意志の弛緩の極限である」<sup>(28)</sup>。この極限は

それ自体直接的には経験可能ではない<sup>(29)</sup>……。なぜなら、あらゆる経験することそのものは覚醒した能動性の状態であるからである。……したがって、入眠することの独特さは関心自我としての自我が受動的になることの普遍性である。そうしてそれは、自我的生、したがって、意志適合的生の状態ないしは、自我が全面的に統一的な消極的関心状態をもつ流れる生の現在という重大な全面現象である<sup>(30)</sup>。

したがって、境界性は、経験の諸々の異なる次元と理解することができる。第一に、境界性は知覚の際の極限形態を表す。すなわち、それは充実の到達不可能な、それゆえ理念的な限界を構成する。どれほど強く能動的・自我的に外的知覚の対象の考察に没入しようとも、自我は、この極限にはアプリアリな根拠によって到達することができず、したがって、対象の完全な原的所与性をもたすことができない。そのかぎりで、この極限は「上へ」向かう自我活動性の限界、能動的に維持される認識関心という枠組みでの直観適合的明晰性の目的論的増大の限界を表示する。第二に、境界性は、眠りの例に即して判明にされるように、到達可能な限界として理解できる。なるほど、眠りは入眠

することの極限であるが、それにもかかわらず、深い眠りに落ちるほど遠くまで意識の自我能動性が沈下する場合に、われわれはこの極限に到達する。したがって、こうした到達可能な限界は、「下へ」向かう自我活動性の限界として解釈できる。第三に、境界性でもって、例えば目覚めと眠りの間の、いっそう根底的には正常性と異常性の間の往来、内的な空間的・時間的延長と持続をもつ閾具有性が表されている。この意味での境界性は、極限へのないしは極限から運動する範囲として理解することができる。

この第三の規定に従って狂気のような意識の異常な状態を把握するならば、この異常性は正常状態の漸次的変位として、他の方向にも、つまり、正常性の方向へと超出することがある閾の踏み越えとして理解することができる。

### 三．一．境界的状态としての狂気

『相互主観性の現象学』第一巻のなかの一節は、「共通世界の構成をやめることとしての正気でなくなることと死」とされている。この箇所の詳述は、両現象が主観にとって「世界から切り離されること」<sup>(81)</sup>を意味するという意味で死と正気でなくなることの類比化を許している。正気でなくなることについてフッサールはこう書いている。「われわれは、任意に強く異常であり、正気ではなく、最終的には世界をもはや成立させない主観も考えることができる」<sup>(82)</sup>。けれども、死とは異なり、狂気は、そこからの復帰が存在する状態である。つまり、限界という意味でよりもむしろ経験のなかでの漸次的往来ないし出入のなかに漂うことがある閾という意味での境界性である<sup>(83)</sup>。

精神病理学では、例えば、患者を世界から挽ぎ取るが、しかし、過ぎ去り、それを通して正常者たちの共同世界に再び入ることを可能にする「妄想的発作」について語られる。死の場合とは異なり、正気を失った者は、相互主観的

正常性という状態あるいはそれどころか異常そのものの闕状態に辿り着き、その現出について報告することができ  
る。正気を失った者は——例えば、アルノルト・ファン・ヘネップやヴィクター・ターナーの人類学的儀礼論の意味  
で<sup>54)</sup>——諸々の世界の間の無人地帯にすみ、その再統合は儀礼的審級や神力的力に依存する「闕存在者」である。民俗  
学的観方から、境界性から患者が報告できることによって可能となる精神療法の枠組みのなかで、治療者は、一定の  
意味では、その移行を組織化・合法化する司会者である。比較可能なものは、死の事例には存在しない<sup>55)</sup>。したがっ  
て、現象学的パースペクティヴから異常性を正常性から研究しようとするのではなく、反対にまた、正常性を異常  
性から研究しようとするならば、精神病理学は「他の世界からの」報告をもつて実り豊かな対質の可能性を提供す  
る。

フッサールは、狂気を、異他経験における他種性の有心的、幼見的、異文化的局面と比較して相互主観性の現象学  
にとつての問題領野として主題化し、主観が統一的世界をもちや成立させることができない状態、社会的な作用、意  
識の基礎的な共感的能作に基づく作用をするための能力の不足によって特徴づけられている状態として規定する。学  
問的意味では、統合失調症という意味での狂気は、思考、知覚、感性性の心理的障病に対する診断として立ち現れ、  
その際、様々な徴候的現出形式を区別することができる。精神科の入院加療の際の最も頻繁な診断として、統合失調  
症はいわば、(例えば、耳のなかの声や視野のなかでの危険をはらんだ現象の幻覚的な立ち現れという) 異他的影響  
による突発や触発されることによって生じる意識の「異常の通例」である。統合失調症の陽性症状として、度々正常  
な体験するはたらきの超過増大が挙げられる。この場合に特徴的なのは、形式的並びに内容的な思考障病、感覚妄  
想、運動不穩である。内容的思考障病にとつて典型的なのは、妄想形成、例えば、論評の声や侮辱の声や命令の声に

よつて患者が話しかけられる聴覚的幻覚<sup>66)</sup>である。さらに、度々、追跡妄想、観察され、追跡され、誘拐されさえずるといふ確信が生じる。相互主観性の現象学の観方からとりわけ興味深いのは、他者たちが統合失調者の思想を読むことやテレパシー能力によって操作することができるという統合失調者の確信である。

現象学的精神科医ヴォルフガング・ブランケンブルクは、統合失調症を「自然な自明性の喪失」<sup>67)</sup>として規定する。統合失調症者は、恒久的な動揺に直面して、諸現出をもはや自分の周りにある世界のなかで端的に与えられているとみなすことができない。この動揺には、方向定位能力の喪失が対応する、すなわち、経験経過の身体的・精神的一律調和性の尺度が信頼できるように妥当することをやめるのである。生世界的日常性の現実性は、統合失調症者たちにとって崩壊する。この場合、当惑は、統合失調症者が自ら創り出す詳細化された説明モデルを手掛かりにその世界の理論に導かれる認識への増大した欲求としばしば並行して現れる。心理療法士と共にこの現象について語るならば、彼らはしばしば、分析的・疑似科学的仕方、患者たちが、自分の意識の異常性を抽象的な水準で顧慮し、理解しようと試みることにしているの驚きを描写する。患者たちが治療会話の際に申し出る私秘的理論建築物は、時折驚くべき複合性に達する。したがって、統合失調症は、第一段階の陽性徴表と相関的に、固有の、異常として経験・認識される意識との関連での超分析性によって特徴づけられる。

統合失調症の病理学的状態を、現象学者がエポケーと還元によって無媒介的な生の遂行から距離を取り、生世界の非主題性から意識の顕在的主題的記述に至る場合に、現象学者がいる状態と比較するならば、懐疑、自己不審、超分析性のような二、三の徴候が終始比較可能である。現象学では、統合失調症者を受動的に襲い、統合失調症者の場合に、正常であることや正常でないことに対する感覚の鋭敏化に至るような「自然な自明性の喪失」は、方法的道具と

超越論哲学的根本決断として登録されているからである。現象学者は、能動的に、方法的仕方での習慣的自明性を、それを成立させるための意識の構成的能作を分析するために、中止する。その際、背後を問われなかった自然的世界態度の自明性、すべてに先んじる世界の意識外的實在性へのドクサ的信念が括弧に入れられる。現象学的考察は、自然的意識が正常で真とみなすものの限界に即して、いっそう深い存在論的水準での正常なものの復元の成果をもつて超越論的正常化へと激変する異他化を推し進める。

しかし、なおいっそう広い意味で統合失調症と統合失調症を攻究する精神病理学は現象学にとって興味深い。医学史家カングレムは基礎的著作『正常と病理』のなかでルナンを引用している。

眠り、狂気、譫妄、夢遊、幻覚は、個体心理学にとって格段に適切な研究領域を正常状態として呈示する。というのは、ここでその目立たなさのために疑似的に現存しない諸現象は、その増大のおかげで、途方もない危機のなかでますますいっそう判明に露わになるからである<sup>88</sup>。

病理学は、経験則、顕微鏡、実験として呈示される。というのは、同様にカングレムによって引用されるリボーによれば、病は「自然自身によって確定された条件の下で特定の——あらゆる人間的運命を乗り越える——やり方の助けで指示される極度に精錬された実験である」からである<sup>89</sup>。病理学的状態で、正常なものはいっそう判明な仕方で見出す、すなわち、病は、完全にフツサールの差異性論証の意味で、通常認識することができるより以上の諸々の差異を認識させるのである。

## 三、二、実験としての現象学

現象学的に反省する観察者・自我は、自我そのものである意識を、その構成的能作、「能作能力」、「能作制限」（すなわち、まさに知覚の取得不可能な過当要求、経験の取得不可能な感覚超出、行動の背後遡求不可能なルーティン化した模範）に応じて問い尋ね、そのつどの内容と内容を与える意識機能の本質に達するために、その内容を段階的連続で変更することによって、ここで徹頭徹尾「実験的」動向を認識することができる。ドン・イーデは、現象学的行いのもつこうした実験的性格を以下のように規定する。「現象学は、まず第一に、探求科学のようなものであり、その本質的構成要素は実験である。現象学は実験的であり、その実験は、注意深く計画された一連の制御と方法に従って行われる」<sup>40</sup>。還元とエポケーという方法的階梯は、現象学が事物に対するその視を鍛え、確かめることができる事物に対して純粋な現象学的考察の領野、意識実験のための領野を露出させる。しかし、現象学的「実験」が生み出すのは、心理的現象や効果の現実性をめぐる知ではなく、それらの可能性をめぐる知である。経験的心理学と精神病学が、現実性の学であるならば、現象学は可能性の学である。諸々の現実とは、現象学的方法によって仮構変造した自由に変更したりする過程のなかで変異体として役立つ。その際、次第に意識現象のすべての偶然的特性が剥ぎ取られる。偶然的なものとは可变的なものは、あらゆる実験の際に可能なかぎり排除される。心理学的実験の際には例えば、これが、実験計画法、被検査者への指示、評価の仕方に影響を及ぼす様々な制御技術によって生じる。可能的な外乱変数が知られているならば、その影響は例えば体系的条件変更の恒常性維持、制御要因の並行化や充填化の技術によって和らげることができたりそれどころか消去できたりする。可能的な外乱変数が知られていないならば、その影響は単にランダム化、その偶然的配置と結合によって制限することができる。現象学的意識実験では、これがエポ



ケー（自然的世界の存在定立の括弧入れ）と還元（志向的意識の構成能作への遡行）によって生じる。

経験的実験は、外乱変数が、独立変数（例えば、テレビ）と従属変数（例えば、記憶スパン）の間の相互依存関係や依存関係を指摘することができ、無作為抽出問題がある特定の人口に対して可能なかぎり代表的であり、その成果が複製可能であるまでに制御される場合、その成果の妥当性を要求することができる。現象学的妥当性は、現象をその現出のいかんにおいて方法的に制御して反省することと言語へともたらずことに成功する場合に達成される。「すべての原理のなかの原理」<sup>(40)</sup>をもつて、フッサールは周知のように、それ自体知覚という与える作用の直観的充実に支えをもたないすべての吟味されていない定説に抵抗する<sup>(41)</sup>。しかし、知覚適合的に提示されるものを体系的に観ながら透徹する場合に遂行される吟味は、経験的に実験するという意味での仮説の吟味ではない。「見られるもの」そのものをしっかり保持することとその固有本質において正当に評価することが、吟味の課題である。しかし、それでもって本来的に吟味されるのは、事象そのものに即して証示することができない事象に関連する過当要求なのである。

現象学に「見ること」はひとつの修煉であり、その際現象学者はいわば実験者でもあり被験者でもある。その際、諸々の過当要求を発見することは、様々な水準で生じる。現象学は、自然的態度で、そのつどの対象を全体として与えると偽って主張する知覚に始まる。しかし、その際、つねにただ対象の一定の局面（例えば、前面）しか目にされず、その一方で、他の局面（背面）は現勢的には知覚に属していない。外的知覚の対象は、たえず「パースペクティブ的に縮減し射映して」<sup>(43)</sup>現出し、対象の全面的直観は不可能である。したがって、知覚は「固有本質に従ってする能力がないことをする」という恒常的過当要求<sup>(44)</sup>を内容としている。十全的知覚、対象の包括的・明証的直観を可能

にするだろう知覚という理想は、外的知覚の際には、達成できない。フッサールはこの理想をむしろ内的知覚の際に現実化されているとみなす。なぜなら、内的知覚の際に対象は「余すところなく把握されており、したがって、知覚することのなかに実的に含まれている」<sup>(45)</sup>からである。対象の存在はその知覚されていることに等しい——「直観の原状態」<sup>(46)</sup>としてすべてのさらなる分析の地盤を提供する知覚の水準から、したがって、存在 (esse) と知覚されるもの (percipi) は一致する<sup>(47)</sup>。

### 三三 位相的図形としての境界性

現象学的記述は、直観の正常性、現出するものの類型群と主観的遂行の習慣的自明性を前提する。異常性は、フッサールの場合に正常性から規定される。しかし、正常性と異常性は意識生の過程性に関連してどのように互いに関わり合うのか。どのようにして正常性の状態から異常性の状態へと至るのか。移行は、それ自体けっして延長をもたない限界性を超えることとしてよりも、むしろ、内的持続と構造を所持している閾状態に入ることや出ていくこととして規定されるべきである。ジェフ・マルパスが記述するように、境界性の位相は、例えば、自然の経過（日没や黎明）のなかにその照応がある覚醒と睡眠（入眠と目覚め）の間の時間のような、同様に、明らかにある状態にも別の状態にも属さない空間が開かれる時間期間である。そうした間空間と時間時間は、その移行的性格によって——ある時には、移行の際によぎる移行の時間があり、ある時には、移行の空間を貫いて通過する人自身がいる——同様に、暫定的な静止、始原状態と目標状態の構造的条件性と所与性の隔たりと解消の瞬間を生み出すことができる。そうした間空間と間位置のなかで、意識にとって前から後からの隔たりの取りやめの際にその最も固有の徴表をはっきり

見せる反省的潜在力が解き放たれることがある。

だから、境界性の時間は反省のための空間を切り開く——作用が休止している際に時間的に行われるときの時間（それゆえ、ヘーゲルが、黄昏の到来とともに、哲学を意味しているミネルヴァの梟は翼を広げると主張するのは適切なのである）。……境界性の時間と空間は不確かなものと不透明なものとの時間と空間、可能性と問いの時間と空間なのである<sup>(48)</sup>。

それは、あらゆる行為が時間的に行われないうままであるだけではなく、主観の自我活動が異他的刺激によって触発されるために最小限に引き下げられていることも意味する。問いの可能性は、この場合、能動的探求的問い尋ねより以上に受動的・受容的開放性の姿勢を表す。こうした状態で触発されるものないし触発するものとして現出するものが、その後回顧的に反省の対象にされうる。その際、反省はその客観を、主観の内部生のなかの「中立的」形式に見出すのではなく、この客観は、反省作用に先行する対応する観察姿勢や態度次第で別様に現出する<sup>(49)</sup>。

さて、哲学は、真正の自己確実化に至るために、エゴの自由裁量の特種な形式、予期されず位置特定できない現象に対して自らをさらすことを必要とすることが、特に現象学を際立たせてきた。経験の受動的側面の切り上げと経験内容の構成の際の受動的・総合的経過の水準の貫徹は、発生的現象学の最も重要な認識論的前進に属する。

まさに記述されるように、移行の諸位相のなかでの意識の境界化をもって、今やそれほど、フッサールの超越論的還元という意味での自我分割や、自己を志向的对象として表象的にするだろう端的な自己客観化は思念されていない

い。むしろその際に自らを喪失することなしに、異他的なものに対して答える際にまさに再び見出すために、自己から離れ、異他的なものに身をゆだねることに起因する自己異他化が問題なのである。反省の能作でありうるそうした「自己への帰還」なしには、ひとは境界性という無人地帯に我を忘れ、統合失調症になるだろう——あるいは統合失調症のままであるだろう。

境界性の状態を意識の正常性の方向へと再び去る反省という「正常な」能作は、統合失調症の際にはもはや可能ではない。ここでは反省は超反省性<sup>60)</sup>——「病的合理主義」<sup>61)</sup>——に高められる。その場合には思考そのものが邪魔になっっている。統合失調症の意識の超分析性は、まさに、正常性へと再び入り込むために必須である自己距離化を不可能化する<sup>62)</sup>。

闕は、滞在することができない非場所として際立たされる。なぜなら、この場所はそれによって闕具有性というその性格を失うだろうからである。闕に滞在することは、闕を、超えて行くことができない更なる闕の此岸と彼岸の場所にする。闕そのものが持続的には「住まれる」ことがないのと同様に、境界性の経験もまた持続することはない。境界的経験の「規範事例」は、明確に境界づけられた持続があり、持続のなかで先行境界的状态が把持的に共に与えられており、後続境界的状态は予想的に予描されていることである。境界的経験は「われわれから他の経験、他の場所、他の時間へとつねに遠ざかる」<sup>63)</sup>。

現象学は、超越論哲学のカント的伝統から遠ざかるなかで範疇表や純粹理性理念を超越論的指引きとして用いようとしなければ、ここから経験的独特色が成立するための意識の構成的能作に遡り問うために、まさにまた「経験的」経験 (empirischen Erfahrung) で始める以外の可能性をもたない。その際、経験的意識には多様な状態があり、

様々な現象学的に差異化することができる志向的連関を形成する。しかし、何が経験的意識のなかで正常であるのかは、はじめから規定することはできず、可能なかぎり多くの変異体を通過するなかで証示されねばならない。境界的状態は、そうした変異化手続きに可能性に従って含めることができる。しかし、境界的状态が統合失調症の状態のように、変異を遂行する現象学者として自身では取ることができない場合に、どのようにそれは機能するべきなのか。実際、他者についてのみ、他者がこの状態にあり、その状態について報告できることが知られている。その状態は、そこから少なくともおよそ可能的な意識の、したがってまた私の意識の可能性として現出する。この状態の現象学的分析の可能性は、ただ間接的に精神病理学の与件を経てのみ、したがって、患者の会話という対話形式から生じる。

現象学的精神医学の伝統のなかでは、現象学は、それをもって一方で患者の描写が解釈され、他方で患者自身の状態を分析するために患者が援助される完成した方法集積より以上のものとして用いられる。意識の現象学的記述への相互主観的練習を通して、患者は、その病理学的に等級づけられる意識としてのその意識の性格特徴への詳細化された視に至り、それは統合失調症の超分析に添い、持続的な認識を創造する際に確実性を媒介する。いっそう稀にしか試みられないことは、病理学的状態そのものの分析を手掛かりにした現象学的認識の豊穡化であり、場合によっては修正である。異常な性格特徴ないしは境界的性格特徴の規定から現象学の領域への逆の影響は従来認識関心の中心にはなっていない。

正常性が正常化の過程に遡行するならば、これは、けっして完全に正常ではないこと、正常になることを意味する。さらに、単純に、誤植一覽や罪の記録の場合の様に逸脱したり一覽にされたりする何かが存在するのではな

い。逸脱するものは、逸脱の経過のなかで生じる。それは、別様にも生じることがあったことを意味する基礎的偶然の表現なのである<sup>64</sup>。

かくして現象学者もまた、病的であれないのであれ、経験の計り知れなさや境界性に引き渡されており、経験の計り知れなさや境界性が立ち現れる場合、それらに関わり合わねばならない。それらがいつどのように立ち現れるかは、あらかじめ取り決めることができない。このいつどのようにについて、心理的生の偶然性と壊れやすさに専心する精神病理学のような諸科学は、純粹に現象学的に獲得することができないだろう洞察を用意することができるとそのかぎり、現象学的視点から、現象学に少なくとも、固有の熟慮にわたる発見法として役立つことができる(う)した諸科学との共同作業はやりがいがある。

註

- (1) Rolf, Thomas: *Normalität. Ein philosophischer Grundbegriff des 20. Jahrhunderts*, München 1999, 32.
  - (2) Rolf, *Normalität*, 32. Vgl. hierzu auch Luft, Sebastian: „Phänomenologie der Phänomenologie“, *Systematik und Methodologie der Phänomenologie in der Auseinandersetzung zwischen Husserl und Fink*, Dordrecht 2002, Kap. 1.
  - (3) Fellmann, Ferdinand: *Phänomenologie als ästhetische Theorie*, Freiburg/München 1989, 23.
  - (4) Hua 13, 364.
  - (5) Hua 13, 380.
- (6) Vgl. Steffan, Frank: *Konstitution der Subjektivität—Zur Funktionalisierbarkeit von Qualia aus phänomenologischer Sicht*, in: Metz, Philippe, Staiti, Andrea, Steffan, Frank (Hrsg.): *Geist—Person—Gemeinschaft*. Freiburger Beiträge zur Aktualität Husserls, Würzburg

2010, 17-51. 「かくして——二人のコーヒー専門家の事例のように——長年の鑑定や比較による同じコーヒーの風味は、一時的に火傷をした舌を用いるのと同様に、あるいは、コーヒーのはじめの一口が、紅茶を前にしてもつ確固とした期待のなかで飲まれる場合とは、別様に呈示される。こうした依存性は複合的で多くの事例で形式化することがかなり難しい。それにもかかわらず、呈示される感覚先行的機能は主観的相対性の発生の理解にとって歩みうる道を表しているように思える」。したがって、正常性は主観相対的であり、受動的過程（習慣化、特定の反復的刺激類に対して曝されることによる沈殿）にも能動的過程（事象への関心、志向的に制御された訓練、顕在的期待——例えば、その飲み物が紅茶であること）にも依存している。

- (7) Taipale, Joonas. *Normalität*, Artikel in: Gander, Hans-Helmuth (Hrsg.): *Husserl-Lexikon*, Darmstadt 2010, 212.
- (8) Taipale, *Normalität*, 212 f.
- (9) Vgl. Hua 15, 230 ff.
- (10) Hua 14, 121.
- (11) Hua 11, 149.
- (12) Hua 11, 149.
- (13) Hua 11, 148 f.
- (14) Hua 11, 168.
- (15) Hua 38, 74.
- (16) Wehrle, Maren: *Die Normalität der Erfahrung. Überlegungen zur Beziehung von Normalität und Aufmerksamkeit bei E. Husserl*, in: *Husserl Studies* 26/3 (2010), DOI 10.1007/s 10743-010-9075-5.
- (17) Wehrle, *Die Normalität der Erfahrung*.
- (18) Wehrle, *Die Normalität der Erfahrung*.
- (19) Hua 14, 133.
- (20) Vgl. Rolf, *Normalität*, 102 f.
- (21) Hua 15, 213.

見えざる限界

- (22) この機能する正常性は、共同体の最終的には人間共同体の内部での正常習慣についてのフッサールの熟慮のなかで仕上げられてくるのが見出される (vgl. Hua 29, 321 ff.)。
- (23) Vgl. hierzu Held, Klaus: *Horizont und Gewohnheit. Husserls Wissenschaft von der Lebenswelt*, in: Vetter, Helmuth (Hrsg.): *Krise der Wissenschaften—Wissenschaft der Krise*, Frankfurt a. M. 1998, 11-25.
- (24) フッサールの予料あるいは「帰納」としてのノエシスの地平とどう規定を参照 (EU, 28)。
- (25) デリダが類似した仕方では「出来事」の垂直性について語っている (vgl. Derrida, Jacques: *Von der Gastfreundschaft*, Wien 2001, 33 ff.)。
- (26) Vgl. hierzu Tengelyi, László: *Erfahrung und Ausdruck. Phänomenologie im Umbruch bei Husserl und seinen Nachfolgern*, Dordrecht 2007, 84.
- (27) Hua 39, 591.
- (28) Hua 39, 591.
- (29) そのなかでしばしば「見えざる」限界について語ることがあろう。
- (30) Hua 39, 591.
- (31) Hua 13, 399.
- (32) Hua 13, 398 f.
- (33) Vgl. zur Differenzierung von Grenz- und Schwelphenphänomenen Waldenfels, Bernhard: *Ordnung im Zwischen*, Frankfurt a. M. 1987, 28 ff.
- (34) Vgl. Gennep, Arnold van: *Übergangsriten*, Frankfurt a. M. 1986; Turner, Victor: *Das Ritual. Struktur und Anti-Struktur*, Frankfurt a. M. 2005.
- (35) ここでは、臨床的死が再び生へと還帰し、彼岸について報告する疑わしい臨死体験は註釈されないままである。
- (36) 現象学的に、「幻覚は「自己触発的表象」(Lohmar, Dieter: *Phänomenologie der schwachen Phantasie. Untersuchungen der Psychologie, Cognitive Science, Neurologie und Phänomenologie zur Funktion der Phantasie in der Wahrnehmung*, Dordrecht 2008, 57) として規定する必要がある。



- (37) Blankenburg, Wolfgang: *Der Verlust der natürlichen Selbstverständlichkeit. Ein Beitrag zur Psychopathologie symptomarmer Schizophrenien*, Stuttgart 1971.
- (38) Renan, Ernest: *L'avenir de la science*, zit. aus: Canguilhem, Georges: *Das Normale und das Pathologische*, Frankfurt a. M./Berlin/Wien 1977, 23.
- (39) Rhot, Theodule: *Psychologie*, zit. aus: Canguilhem, Das Normale und das Pathologische, 23 f.
- (40) Ihde, Don: *Experimental Phenomenology. An Introduction*, New York 1977, 14.
- (41) Hua 31, 52.
- (42) ハイテガーは、フッサールの許での修業時代を回顧してこう書いている。「フッサールの教訓は、同時に、哲学的知識の吟味せずに使用することを見合わせることを要求するが、しかしまた、偉大な思想家の権威をもちだすことの断念も要求する現象学的に『見ること』の漸次的練習のなかで生じた」(Heidegger, Martin: *Mein Weg in die Phänomenologie*, in: Heidegger, Martin: *Zur Sache des Denkens*, Tübingen 2000, 86)。
- (43) Hua 19/2, 589.
- (44) Hua 11, 3.
- (45) Hua 19/1, 365.
- (46) Hua 6, 107.
- (47) 現象学的意識実験について語ることは容易に誤解されるだろうが、しかし、ここで自己実験が客観化する道具なしに企てられるという印象を与えるように思え、それは、普遍妥当性について何も言明することができず、実験の成果の妥当性範囲が、実験を遂行する主観に制限されることを含意する。実験者の客観的立場はなくなってしまうように思える。現象学的分析は「自己分析」や「自己現象学」に制限づけられるように思える。しかし、それは、客観的に妥当的言明を生み出すことができるためには、さらにまた、「ヘテロ現象学」によって補充されたり、それどころか置き換えられたりせねばならないのだろうか。この疑いは事実少なくない経験的学者たちと分析哲学者たちによって抱かれる。それは内観主義という非難によって支えられる (vgl. z.B. Dennett, Daniel: *The Intentional Stance*, Cambridge 1987, 154; Dennett, Daniel: *Consciousness Explained*, Boston 1991)。「自己知」の形式としての内観と現象学的記述のかかわりについての批判的議論は以下に見出

見えざる限界

見えざる境界

- われら。 Thomasson, Amie: *Introspection and Phenomenological Method*, in: *Phenomenology and the Cognitive Sciences* 2 (2003), 239-254.
- (48) Malpas, Jeff: *At the Threshold: The Edge of Liminality*, Vortrag zur Ausstellung, 'Liminality', kuratiert von Colin Langridge in der Carnegie Gallery, Hobart (Tasmanien, Australien) im März 2008.
- (49) Vgl. zu Husserls Einstellungslehre Statti, Andrea: *Systematische Überlegungen zu Husserls Einstellungslehre*, in: *Husserl Studies* 25/3 (2009), 219-233.
- (50) Vgl. hierzu Sass, Louis; Parnas, Josef: *Schizophrenia, Consciousness, and the Self*, in: *Schizophrenia Bulletin* 29 (2003), 427-444.
- (51) Minkowski, Eugene: *La schizophrénie. Psychopathologie des schizoïdes et des schizophrènes*, Paris 1927.
- (52) それでもやはり、自分自身の思考との独話という中間領域のなかである一定の安定性に達するために、儀礼化、特定の心的(と身体的)ルーティンのつねに等しい遂行への衝動が生じる。Vgl. Fuchs, Thomas: „Theory of Mind“ oder „Common Sense“? *Zur Intersubjektivität in Autismus und Schizophrenie*, in: *Schizophrenie* 23 (2007), 22.
- (53) Malpas, *At the Threshold: The Edge of Liminality*. 文中では文化人類学的パースペクティヴから注意すべきだったのは、徹頭徹尾文化的に統制され、この統制によって結晶化した、こうした本質規定に、つまり、境界的状态が持続的な状態になる場合、矛盾するように思える境界化の形式が存在することである。民族誌的記録が判明にはっきり目にさせるように、数多くの文化のなかに、境界性の位相が「正しく」、文化的規範的に符号化された仕方で「関存在者」(不死者、追放者、失敗した新洗礼者等々)という人物像が存在する。この存在者は、突飛な、それによって傑出した形態であるだけではなく、例外事例として共同体の統一を内側で証明するがゆえに、社会的統一的要素でもある。
- (54) Waldenfels, Bernhard: *Normalität im Widerstreit*, Festvortrag zur feierlichen Eröffnung des Bernhard Waldenfels-Archivs im Rahmen der Husserl-Arbeitstage 2009, Univ. Freiburg am 26.11.2009.

文献

Blankenburg, Wolfgang: *Der Verlust der natürlichen Selbstverständlichkeit. Ein Beitrag zur Psychopathologie symptomarmer Schizophrenien*, Stuttgart 1971.

- Canguilhem, Georges: *Das Normale und das Pathologische*. Frankfurt a. M./Berlin/Wien 1977.
- Dennett, Daniel: *The Intentional Stance*. Cambridge 1987.
- Dennett, Daniel: *Consciousness Explained*. Boston 1991.
- Derrida, Jacques: *Von der Gasifiziertheit*. Wien 2001.
- Fellmann, Ferdinand: *Phänomenologie als ästhetische Theorie*. Freiburg/München 1989.
- Fuchs, Thomas: „Theory of Mind“ oder „Common Sense“? Zur Intersubjektivität in Autismus und Schizophrenie. in: *Schizophrenie* 23 (2007), 14-25.
- Gemep, Arnold van: *Übergangsrizen*. Frankfurt a. M. 1986.
- Heidegger, Martin: Mein Weg in die Phänomenologie. in: Heidegger, Martin: *Zur Sache des Denkens*, Tübingen 2000, 81-90.
- Held, Klaus: Horizont und Gewohnheit. Husserls Wissenschaft von der Lebenswelt. in: Vetter, Helmuth (Hrsg.): *Krise der Wissenschaften —Wissenschaft der Krise*. Frankfurt a. M. 1998, 11-25.
- Ihde, Don: *Experimental Phenomenology: An Introduction*. New York 1977.
- Lohmar, Dieter: *Phänomenologie der schwachen Phantasie. Untersuchungen der Psychologie. Cognitive Science, Neurologie und Phänomenologie zur Funktion der Phantasie in der Wahrnehmung*. Dordrecht 2008.
- Luft, Sebastian: „Phänomenologie der Phänomenologie“. *Systematik und Methodologie der Phänomenologie in der Auseinandersetzung zwischen Husserl und Fink*. Dordrecht 2002.
- Malpas, Jeff: *At the Threshold: The Edge of Liminality*. Vortrag zur Ausstellung ‚Liminality‘, kuratiert von Colin Langridge in der Carnegie Gallery, Hobart (Tasmanien, Australien) im März 2008.
- Mez, Philippe; Staiti, Andrea; Steffan, Frank (Hrsg.): *Geist—Person—Gemeinschaft: Freiburger Beiträge zur Aktualität Husserls*. Würzburg 2010.
- Rolf, Thomas: *Normalität. Ein philosophischer Grundbegriff des 20. Jahrhunderts*. München 1999.
- Sass, Louis; Parnas, Josef; Schizophrenia, Consciousness, and the Self. in: *Schizophrenia Bulletin* 29 (2003), 427-444.
- Staiti, Andrea: Systematische Überlegungen zu Husserls Einstellungslehre. in: *Husserl Studies* 25/3 (2009), 219-233.

Steffan, Frank: Konstitution der Subjektivität—Zur Funktionalisierbarkeit von Qualia aus phänomenologischer Sicht, in: Merz, Philippe; Steini, Andrea, Steffan, Frank (hrsg.): *Geist—Person—Gemeinschaft. Freiburger Beiträge zur Aktualität Husserls*, Würzburg 2010, 17-51.

Taipale, Joonas: Normalität, Artikel in: Gander, Hans-Helmuth (Hrsg.): *Husserl-Lexikon*, Darmstadt 2010, 212-214.

Tengelyi, Laszlo: *Erfahrung und Ausdruck. Phänomenologie im Umbruch bei Husserl und seinen Nachfolgern*, Dordrecht 2007.

Thomasson, Annie: Introspection and Phenomenological Method, in: *Phenomenology and the Cognitive Sciences* 2 (2003), 239-254.

Turner, Victor: *Das Ritual. Struktur und Anti-Struktur*, Frankfurt a. M. 2005.

Waldenfels, Bernhard: *Ordnung im Zwischen*, Frankfurt a. M. 1987.

Waldenfels, Bernhard: *Normalität im Widerstreit*, Festvortrag zur feierlichen Eröffnung des Bernhard Waldenfels-Archivs im Rahmen der Husserl-Arbeitsstage 2009, Univ. Freiburg am 26.11.2009.

Wehrle, Maren: Die Normativität der Erfahrung. Überlegungen zur Beziehung von Normalität und Aufmerksamkeit bei E. Husserl, in: *Husserl Studies* 26/3 (2010), DOI 10.1007/s10743-010-9075-5.

#### 【訳者解題】

本論文は、Thiemo Breyer, Unsichtbare Grenzen. Zur Phänomenologie der Normalität, Liminalität und Anomalität, in: Philippe Merz, Andrea Steini, Frank Steffan (Hrsg.), *Geist—Person—Gemeinschaft. Freiburger Beiträge zur Aktualität Husserls*, Würzburg 2010, 109-127 の翻訳である。著者ティエーモ・ブライヤーは、フライブルク大学で博士学位を取得後、同大学フッサール文庫共同研究員、ハイデルベルク大学哲学・精神医学カール・ヤスパース講座のトーマス・フックスの許で研究助手を経て、フライブルク大学から哲学の教授資格を取得し、現在ケルン大学人文学部教授である。また、二〇二一年七月からはディーター・ローマーの後継として同大学フッサール文庫の所長を務めている。これまでに三冊の単著 *On the Topology of Cultural Memory* (Königshausen Neumann 2007) ‘*Attentionalität und Intentionalität*’ (Wilhelm Fink 2011) ‘*Verkörperter Intersubjektivität und Empathie*’ (Vittorio Klostermann 2015) などには二〇冊近くに及ぶ編著を刊行している。こうした経歴や研究からも容易に知られるように、現代ドイツを代表する現象学者の一人である。

本論文は、フッサール現象学の正常性と異常性についての分析を踏まえて、意識のもつ過程性に着目することを通して境界性を正常性と異常性の中間現象・移行現象として見出している。この正常性と異常性の中間現象・移行現象としての境界性の現象学的分析を通して、現象学と心理学や精神医学といった経験科学との交錯領域での生産的対話による共同作業の可能性と展開を標榜する試みである。

まずフッサールの現象学における正常性と異常性という現象学的概念が精査される。正常性と異常性という概念を単に硬直した対極的な概念として捉えるだけではなく、正常な経験と異常な経験のもつ過程的性格が、正常性と異常性の間の動的移行としての境界性に注目することによって把握されることになる。こうした正常性と異常性の間の中間現象・移行現象としての境界性は、フッサールによって正気でなくなることのような境界的狀況の現象学的分析によって捉えられることになる。そこで主題的に分析されることになる正気でなくなるが、そこから復帰することができず経験することができない死のような限界としてではなく、そこから回復・復帰が可能な正常性と異常性の往来・出入の閾という境界性現象として取り上げられる。この境界性現象にこそ現象学と経験科学、この場合には精神病理学との交錯点が見出される。そのために境界性現象に対する分析として精神病理学が取り上げられる。精神病理学が語るように、正気を失った者は異常状態の閾状態へと辿り着き、なおその状態について報告することができる。これによって正常性から異常性を研究しようとする現象学に対して、精神病理学から異常性から正常性を研究する豊かな可能性が開かれることになる。例えば、こうした脈絡で、ブランケンブルクによる「自然な自明性の喪失」としての統合失調症が取り上げられる。それによって、統合失調症の病理学的状態と現象学者によるエポケーと還元の遂行とが比較対照され、その類似性と差異とが明らかにされる。そうして境界性に対する現象学と精神医学それぞれの分析とそれを踏まえた対話の豊かな可能性が相互にどのような寄与をもたらすのかが見事な手際によって明らかにされている。

ケルン大学フッサール文庫は、フッサールの遺稿の整理と公刊を主要な責務の一つとしてきた。その主要業務をほぼ終えた現在、新たに所長に就任したブライヤーによる本論考から窺い知ることができるのは、フッサール文庫の今後の展開である。フッサールについての文献実証的な読解による現象学的思考を自家薬籠中のものとしながら、隣接する分野、例えば、精神医学との積極的な対話を図ろうとする姿勢は、ヨーロッパの新しい世代の現象学者に広く認められる傾向である。とりわけ、現象学を主題とした博士論文によって学位を取得した現象学徒が、現代の現象学的精神病理学を代表するフックスの許で共同研究を行いながら教授資格を準備するというブライヤー教授自身がたどった経歴とその研究成果は、狭義の文献実証的な研究のみに専心する

のではなく、むしろそうした文献実証と解釈に基づいて精神病理学や心理学をはじめとする隣接領域との共同作業へと積極的に乗り出していくというこれからのフッサール文庫で展開されていくことになるだろう研究が取ることになるかもしれない針路を示唆しているように思える。フッサールの正常性と異常性についての草稿から境界性という現象を鮮やかに取り出し、精神病理学での同様の現象についての研究と照合する本論考には、論文そのものもつ学術的価値は当然のことながら、こうした異分野との交流に積極的に取り組む現象学についての研究の新しい伝統の確立と展開の萌芽を認めることができるだろう。

\* 訳出に際して、原著者の了解のもと冒頭におかれた英文による要約は割愛した。また、引用出典と引用箇所誤りについては訳者の責任で修正している。